

ネギ量産、障害者就労支援と両立＝「三方よし」の農福連携＝

—埼玉県白岡市・農業法人「アルファイノベーション」山田浩太社長—

埼玉県白岡市の農業法人「アルファイノベーション」の山田浩太社長は、経営コンサルティング会社からの転身組で、ネギの量産と障害者就労支援を両立させている。障害者の能力を生かす効率的な作業環境を整えるとともに、大手外食チェーンなどへの販路を確保し、出荷量は右肩上がりだ。自社にも顧客にも、そして障害者就労でもプラスという「三方よし」の農福連携モデルを提示し、新規参入企業への助言にも力を入れる。

◇仕事の達成感を味わって

山田さんは障害者就労継続支援B型事業所のNPO「めぐみの里」（埼玉県白岡市）の理事長も務めている。在籍する21人の知的障害者、精神障害者の1日は午前9時、朝礼と体操で始まる。ネギ畑に隣接したビニールハウス内の作業場に移り、おそろいの明るい緑色のエプロン姿で9時20分から仕事だ。めぐみの里は、アルファイノベーションの農場で栽培された青ネギと長ネギを、出荷できる状態に整える作業を請け負っている。外側の痛んだ葉をむく係、根や葉を切り落とす係など、各自の持ち場で仕事に打ち込む。

通所し始めたばかりの人には、週1日の勤務から始めて慣れてもらったり、機械を使わずに手だけでできる作業を担当してもらったりするなど、一人ひとりの力に応じて仕事を割り振る。「できる作業は必ずある。ゆっくりでもいいから、まずできることをして自信を持ってもらう」と山田さん。農作物の扱いは、要求される精度が工業製品ほど厳しくない点で、障害者に向いていると分析する。

ダークグリーンのエプロンを着た職員も、障害者に混じって作業する。作業で困っていないかどうか確認するなど、全体をチェックする役割を担うが、口出しすることは少ない。障害者の中に熟練者がいれば、不慣れな人に指導するように促す。「自分でできることは自分たちでした方がいい。人に教えることで自分も成長する」（山田さん）との期待からだ。障害者自ら、同僚の作業レベルに刺激を受けて努力をしたり、分からないことを質問したりする光景もみられるという。



作業場で青ネギを手に職員と話す山田さん（右）

休憩や昼食などを挟んで作業は続き、障害者らは午後4時に退勤する。出荷量は、1週間で青ネギが3トン、長ネギが1トン強。めぐみの里では障害者らに対し、福祉施設で一般的な「利用者」という呼び方は用いない。障害者はスタッフ、職員はマネジャーと呼ばれ、後輩と先輩のような関係で一緒に仕事を成し遂げる。「全員でネギを（製品として）仕上げる達成感を味わってほしい」と山田さんは強調する。

アルファイノベーションのネギは、山田さんが社長を兼務する青果物卸売会社「アグリジョイン」（埼玉県白岡市）に納入される。同社は、全国各地の農家からもネギを仕入れ、牛丼、すしといった大手外食チェーン、カット野菜工場など23社に販売。年間売上高は約1億7000万円に上る。

◇コンサル時代に着眼

1996年に大学を卒業後、大手電子部品メーカーを経て、経営コンサルティング会社「船井総合研究所」（大阪市）に勤務した山田さん。生ごみを肥料として活用する食品リサイクルビジネスを担当したことを機に、農業に関心を持った。2006年から市民農園で農作業を経験した後、「鯉淵学園農業栄養専門学校」（水

戸市)で農業を勉強。10年からは農業参入企業へのコンサルティング業務に携わるうちに、農作物の生産や販路開拓に本格的に取り組みたい気持ちが膨らんでいった。

一方、福祉業界で話題になり始めていた農福連携にも興味を持った。障害者福祉施設を訪問し、広大な農地で入所者らが野菜などを生産する様子を見学。「障害者は農業と相性がいい」と漠然と感じるようになった。11年に船井総研を辞めた後、13年にかけてアルファイノベーション、めぐみの里、アグリジョインを相次いで設立した。白岡の地を選んだ理由は、自宅のある東京から1時間という近さ。つてをたどって農地を借り、農福連携の実践にこぎつけた。



青ネギ出荷作業に取り組むめぐみの里の職員と障害者ら

作物を選ぶに当たっては、ハウス栽培のような設備投資がかさむものや、周年栽培ができないものは経営リスクが大きいと考えた。また、市場規模が小さい作物や、単位面積当たりの売上高が低い作物も避けたいと思った。コストダウンには、作業を機械化しやすいかどうかもカギになる。絞り込んだ結果、「ネギ」が優秀な作物だと判断した。外食業界の動向から、業務用ネギの需要が伸びるとの見通しもあった。栽培面積は1ヘクタール程度からスタートし、現在は8ヘクタール以上に広がっている。

◇人生を考えた思いやり

設立から間もないめぐみの里で、障害者が作業場の段差につまずいたことがあった。福祉の現場経験が長い職員は、段差をなくすべきだと主張した。目先のことだけを考えれば、段差を取り除き、障害者を危険から守ればいいということになる。しかし、長い目で見れば「本人の成長につながるとは思えない。つまずかないよう気を付けることを教えるのもわれわれの仕事だ」（山田さん）と考えた。「一般就労」に向けた訓練の場として、「短期的な親切」より「人生を考えた思いやり」を大切にする。めぐみの里のモットーだ。

職場に障害者がいることは、自身や職員にとっても勉強になるという。障害者らにとっても作業しやすいよう、作業手順の単純化など工夫を加える。障害者と向き合う際には、相手の心境に思いをめぐらし、どのように助言したら伝わるか熟考する。障害による能力の違いはあるが、思いやりを持ってコミュニケーションを取れば、互いの力が引き出され、「1+1が3にも5にもなる」（山田さん）と言う。農福連携を志す企業へのコンサルティングも行う山田さん。コンサル先の人員採用から関わり、採用された人にはめぐみの里で研修を行う。障害者への接し方など、めぐみの里の理念を知ってほしいからだ。

これまでに5人の障害者がめぐみの里を卒業し、小売りや物流などの企業への一般就労を果たした。「スタッフ」の卒業はめぐみの里の収入にはマイナスだが、「彼らの幸せを考えたら、ここにとどまっていたはいけない」と山田さんは強調する。障害者が力を伸ばして就職できたという実績は、めぐみの里の福祉サービスの品質の証明でもある。障害者らの自立に向け賃金を現状の月約1万4000円から2万円に引き上げることも目標に掲げる。

来年にはネギ畑を約10ヘクタールまで拡大し、めぐみの里の定員も数年以内に倍増させ、生産量を増やす計画だ。

一般の農家と遜色のない品質のネギを提供することで、より多くの顧客を獲得できる。一方で、障害者の手掛ける作業は訓練と位置付けられるため人件費は抑えられ、黒字を確保できる。農業経営と障害者支援の好バランスを実現している。（さいたま支局・竹内瑞穂）

[＜表紙・目次へもどる＞](#)

〔基本情報＝2016年7月末現在〕

名称：アルファイノベーション

設立：2011年12月

代表取締役：山田浩太

資本金：300万円

所在地：埼玉県白岡市

従業員数：7人（役員含む）